



呉巡検調査を振り返って その二 : 3年ぶりの日本、 アンニョン呉、呉々も安寧

金, 潤煥

(Citation)

海港都市研究, 18:81-82

(Issue Date)

2023-03-27

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCD0I)

<https://doi.org/10.24546/0100482800>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/0100482800>



呉巡検調査を振り返って その二 3年ぶりの日本、アンニョン呉、呉々も安寧

金潤煥(キムユナン)

神戸大学人文学研究科海港都市研究センター主催の学術会議及びフィールドワークプログラムに招かれ、2023年1月6日(金曜日)から1月9日(月曜日)までの三泊四日の日程で日本国広島県呉市に行ってきました。簡単に自己紹介をしておきます。私は神戸大学人文学研究科で社会動態専攻の日本史学コースで勉強しました。2016年夏、日本での留学を含む約10年間生活を終え韓国の釜山に戻りました。そして、講師や研究員を経て今現在は韓国海洋大学の国際海洋問題研究所で学術研究教授として働いています。日本近現代史の中でも、近代帝国日本の形成過程を海外・植民地社会の日本仏教が媒介した構造から分析を行う作業をしています。2016年以後は、夏休みや冬春休みの期間中、日本に滞在しながら史料調査や研究をやってきました。しかしCOVID19の影響で約3年間は日本へ渡航することができませんでした。日本での資料調査やフィールドワークができない状況が続き、研究関係の本や論文など限られた資料の確報しかできず、これまで収集した史料や韓国側の資料を利用して研究を続けましたが日本史研究者として日本へ行けない不安も益々大きくなっていました。また最近進行中の研究は日本の研究者の前で発表する機会もなかったわけです。それが今回のプログラムで約3年ぶりに日本への渡航することが出来て本当に嬉しかったです。心より感謝しております。短い感想文ですが以上のような久々の日本渡航記録を含め呉・広島での日程の簡略に紹介したうえ感想を述べたいと思います。

1月6日、ソウルから出発し、韓国仁川空港から福岡空港まで1時間20分間飛行し日本へ到着しました。3年ぶりの印象は「人が多い、多すぎる」でした。COVID19の影響で制限されていた人々の移動が再び復興する瞬間のように感じました。というのも、私は2020年2月関西空港から釜山へ戻りましたが、その時はこれまで経験した事もない人々が少ない空港でした。その理由から不思議で奇妙な感情でした。しかし入国者が多かったため入国審査に2時間かかりました。ソウルから福岡までの飛行時間より長い時間が掛かったのです。そして博多駅へ移動、そこから新幹線を乗り広島へ、また広島から呉に行きました。久々に乗れた飛行機、日本のタクシー、新幹線、電車、全てが懐かしく感じました。呉に到着してから呉市役所へ移動し呉の関係者及び戦前・戦後を経験した方から呉の歴史に関

してお聞きし質問応答形式のセミナーをやりました。

1月7日、呉市内でフィールドワークを行いました。大和ミュージアムを観覧し、海軍施設を船で回りました。そして軍港都市であった呉市内を歩き、海軍官舎や美術館にも行きました。美術館では、呉と関わる作品が展示されており、特に戦争の虚しさが感じられた「戦艦大和進水式図」という作品が印象深かったです。

1月8日、呉から広島まで船で移動し、広島郷土博物館や缶詰め工場跡地、広島平和資料館を観覧しました。その後、呉に戻り牡蠣船で5時間にわたるセミナーをしました。午前中の広島郷土博物館で学んだ牡蠣船で発表をした事や牡蠣船の店の方が語った呉の歴史は印象深い経験でした。

1月9日、呉を出て福岡へ移動しました。福岡駅の風景は、成人式でもあり、韓国や外国人観光客も多く賑やかな様子でした。コロナ禍の長い長いトンネルから抜き出す瞬間のような風景でした。

この四日間、人々が移動すること、会うこと、会って話すこと、そこから考えることの大事さをせつに感じました。フィールドワークやセミナーでは、歴史や文学、地理学、社会学など先生の方々の説明や意見交換で豊かな理解ができました。共同研究や集団知性の良さを改めて実感しました。海港都市センターを関わる国際シンポジウムは、日本の神戸、韓国の釜山、中国の中山などで行われ、研究発表が中心で半日ぐらいのフィールドワークをするのが定番でした。今回プログラムはフィールドワークが中心になり本当に良かったです。コロナ禍で対面の交流で出来なかったからこそだったかもしれません。呉や広島のフィールドワークを通じて、最近流行りの Larchiveum (Library + Archive + Museum) という言葉が思い出しました。呉や広島の地域一帯が Larchiveum であり、それにフィールドワーク的な要素も含むと、もっと立体化且つ総合化した空間を経験しました。その経験のキーワードは戦争と生存でした。私たちは今現在、戦争の時代を生きています。2022 年からのロシアによるウクライナ侵攻はまだまだ続いていますし、東アジアの中国や日本、北朝鮮、韓国などの国々も軍備拡張に力を入れています。戦争が齎す不幸は歴史的に経験してきたことであり、戦争が終わっても長い時間いや永遠に人々の生存と関わっています。今回フィールドワーク地域であった呉や広島はこのような歴史が学べる場です。軽々しく戦争をいう国家の指導者だちが戦争の恐ろしさを歴史から学んでほしいです。そのため研究者として努力しなければなりません。そしてタイトルのアンニョンは韓国語で「こんにちは」にあたる表現であり、安寧の意味です。戦争で苦しいんでいる方々の安寧お祈ります。

(韓国海洋大学)